

Rosa Plumbula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレターNo.30

目次

巻頭言	1
大学教育研究開発センターから	2
専門部会から	
ー諸君の受講を待っていますー	3
聞いてほしい私の意見	
ー新入生のみなさんへー	7
Voice	
ー私のイチオシ授業ー	8
教養教育古今東西	10

(平成17年4月発行)

入学を祝って

学長 菊池 龍三郎

新入生の皆さん、茨城大学入学おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

日本経済は十数年続いた長い低迷を脱して最近やっと光が見え始めてきました。しかし、この十数年の間に社会は大きく変わりました。グローバル化が進み、産業から教育に至るまでの様々な分野に新しく「世界基準」が入ってきました。それに伴って当然、大学生に期待される資質や能力も変わりました。たとえば、これからは外国語、なかでも国際共通語としての英語の読み・書き・話す・聴く力は必須です。本学は社会に出てから役立つ英語の基礎を身につけてもらうために、全学的に「総合英語プログラム」を実施します。ぜひ新入生の皆さんには卒業後のことを考えて、しっかりと学んで下さい。今年度からは交流協定校であるアメリカのイースターン・ワシントン大学等への短期の語学研修も始まります。

社会性やコミュニケーション能力もますます必要になります。

インターンシップも体験してみてください。困ったことがあってもひとりぼっちだと思わないで下さい。友人同士の交友は勿論のこと積極的に先生方の研究室を訪ねたり、困ったことがあったら事務スタッフにも遠慮なく相談してみてください。「なんでも相談室」もあります。何よりも、心を許し合える友人をつくって下さい。学業の中でもいいし、クラブ活動を通してでもいいのです。いい友人ができれば、それだけで大学生活は半分成功です。

またその一方で、変化する時代と社会においても変わりなく期待される力があります。たとえば「基礎的な学力」です。これの必要は増すばかりです。ではどうするか。たとえばひとつの方法として、在学中に目標を立てて、ぜひたくさん本を読んで貰いたいのです。これは以前にもこの欄で書いたことなのですが、立花隆氏という名前は知っているでしょうか。評論家というより現代日本の「知の巨人」とされる方です。氏は、日本があつたバブルに浮かれ、反対に米国では経済がどん底にあった十数年前、すでに日本の凋落を予言したのでした。何に拠ってかという、米国の若者やビジネスマンは毎月相当に内容のある本を四冊以上は読み、それなのに自分に何が欠けているかと尋ねられると決まって「知識」と答える。片や日本の若者やビジネスマンはほとんど本と言えものは読まない。人間はたくさんの文章を辛抱強くしっかり読むことによってのみ思考力がつく。言葉を離れてロジカルな思考力は育たない。緻密な思考は、実に読み書きによってのみ可能となる。言い換えれば氏は、本物の思考力はインターネットや携帯電話（その頃はまだなかったけれども）だけでは決して育たないと強調したのでした。氏は本学の附属中の出身で、すでに中学生のときから音に聞こえた読書家でした。氏の想像を超える知的活動を支えるのは、多分少年時代からの膨大な読書量なのでしょう。その意味でも、新入生の皆さんにはたくさんの本を読んでほしいと願っています。必ずや皆さんに自信を与えてくれるはずで。

健康に十分に気を付けるなど自己管理をして、有意義な大学生活を送って下さるよう期待しております。

大学における授業への取り組み姿勢

前大学教育研究開発センター長
曾 我 日出夫

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。大学教育研究開発センターはどこの学部にも属さない大学全体の機関ですが、実は新入生のみなさんにとってたいへん関係の深いところです。茨城大学の授業科目は大きく教養科目と専門科目とに分かれています。大学教育研究開発センターは、この教養科目を企画実施したり、改善したりする所なのです。新入生のみなさんは教養科目を多くとることになりますから、これから何度かこのセンター内にある教養教育係に足を運ぶことになるでしょう。

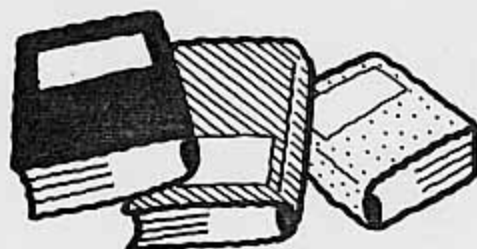
教養科目の目標には次の6項目が掲げられています。

- 1) 心身の調和を図り、生涯にわたる人生設計への基礎を培う。
- 2) 専攻する学問と異なる専門分野の学問に触れることにより、多種多様な文化と価値観を理解し、幅広い視野を身につける。
- 3) 学際・複合的学問分野に触れることにより、総合的・全体的に物事を捉える態度を養う。
- 4) 物事を主体的に判断し、実証的な態度や批判的能力を身につける。
- 5) 専攻する学問の基礎を修得することによりその学問の基本を理解する能力を培う。
- 6) 国際化・情報化の社会に主体的に対応できる能力を培う。

教養科目は、外国語科目、健康スポーツ科目、・・・というようにいくつかの種類からなりますが、それぞれ上のどれかの（あるいは複数の）目標を達成するために置かれています。この目標はかなり漠然としたもので、実際に授業を取ろうとすると、多くの場合かなり選択の幅があります。そのとき非常に役に立つのが、入学のときに配った「シラバス」とか「授業計画」とか呼ばれている分厚い本です。この本には、各授業がどんな内容なのか詳しく書いてあります。ぜひ、多少時間がかかっても、よく読んで授業選びに役立ててほしいです。

取った科目が本当にためになるかどうか？ それは

どの授業を選択するかで決まるのかというと、もっと大切なことがあります。それはみなさん一人一人の取り組む姿勢です。何かを習得するということは、最終的には何か「知識」とか「技能」とか呼ばれるものが自分の中にできることを意味します。しかし、この最後に残る知識をひたすら取りこむという姿勢で役に立つものが得られるかというと、ちょっとそれは疑問です。知識や技能は、必要に応じて使えなければ意味がありませんが、多くの場合何をどう使えばいいかすぐ分かるようにはなっていません。そういうときでも役に立つ知識であるには、結論だけを暗記したのではだめなのです。時間がかかっても、なぜ著者がそんなことを言おうとしたのか、いろいろ試行錯誤して著者の思いを再現（追体験）して得られたものでないと役に立たないのです。ですから、いくつかの科目については、予習復習の時間を十分とって、納得するところまで追求してほしいです。そういう姿勢で取り組みれば、将来本当に役に立つ知識が得られるでしょう。



専門部会から — 諸君の受講を待っています —

外国語科目専門部会長

梁 継 国

新入生諸君、ご入学、おめでとうございます。

大学での新しい生活が始まり、真っ先に直面するのは、履修授業科目の選択ではないかと思います。専門科目はもちろん、教養科目の外国語科目についても相当迷っているでしょう。とは言いながら、とにかく実用的で、日増しに国際化されつつある社会の必要にあわせて選択履修しなければならないと助言はしてあげたいです。現代社会におきまして、英語は当たり前のことですが、それ以外の所謂未修外国語のどちらか一つを身に付けなければならないことは、現代の人間として備えるべき素質になっております。それは、諸君の先輩方の就職活動等によって実証されております。

茨城大学の外国語科目は、英語のほかに、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、スペイン語などがあります。どの言語でも、一つ履修すれば、自分の世界が大いに広がり、大学での勉強の楽しみも倍増されます。特に中国語、朝鮮語は、社会からの必要性が高く、その人気ぶりはここ数年来、上昇する一方で、衰えは全く見られません。

茨城大学の諸外国語授業は、言葉と同時にその国の文化、社会事情、生活慣習等も勉強できるように設定され、工夫されております。また、ドイツ語の大半、フランス語、中国語、朝鮮語などは、みな同一教員、同一教科書による連動式の授業を行っております。短期間に、有効に、実際に使えるような言語を身につけられるようにしております。そして、どの言語もみな、ネイティブスピーカーの教員がおり、会話能力重視の特徴があります。自分を21世紀にふさわしい国際人に育てるため、様々な国の人達とコミュニケーションが取れるようにするため、諸外国語のどれでもよろしいが、是非チャレンジしてみてください。

総合英語教育準備委員会委員長

福 田 浩 子

「英語」というと何を連想しますか？受験勉強を経て入学した皆さんにとっては、「試験科目」の一つでしょうか？得意な科目ですか？それとも苦手な科目でしょうか？

言うまでもないことですが、英語は地球上で使われている言語のうちの一つ、それも世界で広く使われている言語なのです。英語の母語話者は主にアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランド、南アフリカなどに住む約4億2400万人だといわれていますが、60カ国を超える国々で公用語かそれに準じる言語として使用されているため、4億人を超える人々が第二言語として使用しており、少なく見積もっても8億人以上の人たちが英語を使っていることとなります。英語という言語は、インターネットの普及やビジネスのグローバル化などの社会の変化もあり、今ではビジネスでも研究でも、避けては通れない言語となりました。

そこで、茨城大学では、本年度から「英語を学ぶことによって、地域社会に生きると同時に、地球規模の視野を持ち、考え、行動できる人間を育成する」ことを理念とし、「総合英語」という時代のニーズに合った新しい英語プログラムを全学で実施します。

このプログラムはヨーロッパの共通参照枠を参考にし、4技能をバランスよく学んでまず自立的使用者になることを目指し、そのうえで専門的な知識や教養を身につけるための英語を学ぼうとするものです。

英語が苦手だった皆さんも、英語が得意な皆さんも、総合英語のクラスから世界へ通じる英語を学びませんか？母語だけでなく英語が使えるということは、将来、きっと皆さんの人生の可能性を開く鍵となってくれるに違いありません。インターネットを使って英語圏の情報を検索したり、ペアで話したり、発表したり、クラス内外でのさまざまな経験を楽しみながら、一緒に英語を学習しましょう。

健康・スポーツ科目専門部会長

松坂 晃

入学、おめでとうございます。

大学で学ぶ教養科目のひとつに健康・スポーツ科目があります。原則として週1回×15回の授業を1年次と2年次に受講します。授業を受ける時間帯（曜日・講時）は学年、学部、学科によって指定されていますので注意してください。開講されている種目には様々な球技（サッカー、テニス、卓球など）や野外活動（山歩き、カヌーなど）、ウォーキングやジョギング、ダンスなどがあります。高等学校までに経験した運動種目を選択する傾向が強いのですが、視野を広げる意味で（少々オーバーですが）新たな種目にチャレンジしてみるのもよいでしょう。

運動を中心とした健康的な生活習慣の育成は、高齢社会日本を支える重要な柱のひとつです。個人レベルでみても、不健康が大きな損失につながることはまちがいありません。ですから健康・スポーツ科目はまさに現代人の必修科目といえるでしょう。それぞれの授業のねらいには、体力の向上、運動技術の習得、健康やスポーツに関する知識、運動習慣の育成などがあげられています。ところで、これらは本当に将来役立つのでしょうか？

学齢期の状況と成人期以降の状況を、長期間追跡して相関係数を調べた研究があります。それらによると、若いときに体力の高い人が成人期以降もずっと体力が高い、とはいえないようです。また、子どものときによく運動した人がその後もよく運動するともいえません。健康やスポーツに関する知識が将来の運動習慣につながるという保証もないようです。かろうじて若いときに獲得された運動技術や巧みさだけは将来に受けつがれるようです。こうしてみると、大学で健康・スポーツ科目を学ぶ意味があるのか疑問に思えてきます。

「役に立たないなら受講したくない」という意見もあるでしょう。それで本当によいのでしょうか？ 直接的な利益だけで判断するのは危険です。わたしは、スポーツは心の豊かさを広げてくれるもの、自分を教育してくれるもの、と考えています。みなさんはどう思いますか？

情報関連科目専門部会長

鹿子嶋 憲一

PCが世の中に普及しだしたのは1990年代、ちょうど皆さんが生まれたのと同じぐらいのことです。それまでコンピュータは文字通り『計算機』であり、複雑な数値計算を必要とする人の道具でした。そして1990年代以降、情報処理・加工機、データ探し、整理機となり、一般の人にも普及する道具となりました。本来電話機だった携帯電話が今や携帯コンピュータとなり、ボタン操作でメールを送ったり、列車や航空機、コンサートのチケットの申し込みをしたり、ホテルの予約をする事ができるようになりました。皆さんはすでにコンピュータを相当使える状態にあると想像します。なのに何故、大学で「情報処理概論」としてPCの使い方を学修するのでしょうか。

今までは、いわば自己流でPCを使ってきたのではないのでしょうか。スポーツの分野、例えばテニス、スキー、ゴルフ。おもしろい、楽しいので自己流にどんどんやり技術も向上します。しかし、どこかで進歩が遅くなる。世の中にはもっともっと高度なレベルの人がいるのに。スポーツの技術には奥深いものがあり、やりようによってはさらに伸びるはずですよ。

PCも同じではないのでしょうか。良き指導者に付いて系統的に学習すれば、基本を踏まえた技術が身につく、より高いレベルに到達できるようになると思います。ここで大事なのが基本の習得であり、PCの構造、仕組み（ソフトウェアの意味の）という基本、大枠を理解することです。英語学習で言えば「文法」を高度なレベルでマスターしていることに相当します。

単に個々のソフトの使い方を身につけるだけでも意味ありますが、「PCの技術の基本ルールは何だ」という問いに、自らの解答を得ることができれば、将来より高いレベルに発展できる基礎を身につけたことになります。是非これを学習の目標に据えて挑戦してください。そして日々の学習の中で疑問点をどんどん掘り出し、先生、ティーチングアシスタントの人に質問してください。きっと楽しい科目となり、皆さんの実力を高めるよい機会となると思います。優れた授業は先生、学生両者の働きかけで創られるものです。皆さんの努力を期待します。

社会科目専門部会長

佐藤 恵一

教養科目の中の分野別科目の一区分として社会分野科目を履修することになっております。履修を必要とされる単位数は、学部・学科によって違いがありますので、「シラバス」をよく読んで下さい。

さて、社会科目の多くは「リベラル・アーツ」としての授業が提供されます（一部専門科目となる場合があります）。この科目のなかには、法学・経済学など7つの授業科目があり、その科目群の中でさらに個々の授業で取り扱うテーマが「授業題目」としてやや詳しく紹介されております。この構造に本学社会科目の特徴が現れていると言ってもよいでしょう。

このような条件の中で1～2科目を選択・履修することになります。それではどのように科目を選択したら良いか？ここが大事なポイントです。最近の「学生アンケート」などを分析した経験、また、授業を担当した経験から、個人的見解として、三つの指針を示すことにしますので、参考にして下さい。

「シラバス」とよく相談すること。

受講生の「アンケート」を分析して驚いたことは、毎年かなりの学生が「シラバス」を読まずに、科目選択を行っていることです（或るクラスでは67%という高い比率になっています）。「シラバス」には、授業のねらい、内容、成績評価の方法まで詳しく載っているのですから、自分の学習したいことと突き合わせてみて受講する科目を決めることが大切です。

大学入学前の社会系科目の学習歴に拘わらないこと。

高校段階の社会系科目は2教科・9科目に分かれています。そのどれ一つとってみても大学の社会科目に直接には対応しません。全く新しい科目を学ぶという心構えで臨むことが必要です。科目名が一番似ている高校の「人文地理」は、大学では「人文地理学」となり、方法論・内容が異なっているはずです。

自分の専攻分野とは異なる分野を知り、積極的に視野を拡げようとする意欲を持つこと。

将来、どのような分野を専攻し、どのような職業に就くにしても、一市民として社会の仕組みを理解し、社会現象の背景を把握する能力を具えておくことは、ま

ずまず重要になります。諸君が大学を卒業する頃には、一般市民が裁判に参加する「裁判員制度」も始まるはずですが、また、会社員になっているとしたら、「会社」は誰のものか、の論争はきわめて身近な問題になっているかも知れません。このような事態に直面したとき、たとえ教養科目として学んだものであっても、方法論や思考経路を思い起こしたりすることによって、慌てないで対処できる力が養成されるのではないかと、いやそうあってほしい、と願いつつ社会科目を開講しているのです。熱心な諸君の受講を待っています。

自然科目専門部会長

川田 勇三

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

これから始まる大学生活に、どんな気持ちで臨まれようとしているのでしょうか。受験勉強に物足りなさを持っていて「これからは本格的な勉強ができるぞ。」と意気の高い人、ひとまず勉強から解放されて「しばらくはのんびりするぞ。」と余裕の人、あるいは、将来に対し既に明瞭なイメージを持ち邁進しようとしている人、そんなものは特になくこれから自分探しを始める人、色々いることでしょう。今はどんな段階であってもよいと思いますが、大学はさし当たり最終教育・最後のまとまったブラッシュアップを受ける場所です。遅くとも卒業する頃までには、自分自身はこの社会の中でどんな役割を果たしたいのか、そのためのどんな人間性・知識・技術を身につけたのか、一応の答えを出す必要があります。

よく言われるように、大学では原則として、この答えは自分なりの計画・試行錯誤から見出すものであって、教師は助言役に過ぎません。すぐに走り出そうと、徐々に速度をあげて行こうと構わないと思いますが、見通し／粘り強さをもって取り組むかどうか、教師や学生仲間とよい人間関係を構築出来るかどうかなどで、到達出来るレベル／皆さんの商品価値は大きく変わります。

さて、教養分野別科目「自然」には2つのタイプがあります。

1. 非理系学部の学生に周辺諸科学としての自然科学

の紹介をするもので、その学問の、(1)概要、対象の認識／分析のための基礎的方法論としての特徴・有用性、(2)生活、社会、環境などとの具体的関わり、(3)課題、などを理解することができるようにします。

2. 理系学部学生（学部・学科指定あり）に、専門科目の一部としてその基礎部分を学修してもらうもので、工学部向け数学の一部では新しい試み（習熟度別）も始まります。

タイプ1が本来の教養科目で、少し難しいものが多いとの批判を受けていますが、積極的に受講して下さるようお願いします。生命、環境などの分野に人気が集まる傾向がありますが、現代社会を支えるという面では、他の分野も同じように重要です。世間相場に捕われることなく、色々な分野を学修して下さるようお願いします。

総合科目専門部会長

関 友 作

ご覧のように、教養科目にはいろいろな種類の授業があります。その最後が総合科目です。総合科目って、いったい何でしょう？

辞書で「総合」をひいてみると、「別々のものを一つに合わせて、まとめあげること」とあります。その反対語は「分析」です。ちなみに、分析とは「複雑なものをその要素に分けて、はっきりさせること」です。

分析といえば、教養科目の区分にもみられるように、学問には、じつにさまざまな分野があります。そして、各分野は、さらに細かい専門に分かれています。これは、複雑な社会や自然を、人間が要素に分けて、はっきりさせてきた結果です。つまり、分析の産物といえます。歴史とともに分析は進み、細かい分野は、どんどん増えてきました。

ただし、分析するばかりだと、多くの分野が生まれる一方で、全体としてのまとまりが薄れていく可能性があります。そこで、総合することも必要になってきます。別々の分野を組み合わせることも、また大切なのです。

じっさい、世の中の問題には、一つの分野の成果だけでは解決できないものが数多くあります。たとえば、

環境問題に対しては、複数の分野の協力が不可欠です。また、そのおよぼす影響も、多面的で全地球的なものです。

というわけで、タテの方向に深めていくのが専門だとすれば、ヨコの方向に広げていくのが総合だといえます。総合科目も、ヨコに広げていくこと、つまり、複数の分野の「つながり」を志向しています。

そこで、総合科目では、専門分野がちがう複数の教員が担当する講義や、学外の講師に来てもらう講義も多くあります。学外の講師は、他大学の先生だけでなく、たとえば芸術関係の方だとか、いろんな人が来られます。これもすべて、何らかのつながりのある人たちです。

ところで、わたしは、自分とは別の分野の先生方と話すことがよくあります。おたがいに専門はちがうのですが、話していると、「おや、そうなのか」と思うことが少なくありません。相手の先生も、たぶん同じでしょう。

じつは、どんなに関係ないと思っている二つのことにも、よく聞いたり見たりしていると、重なってくる部分、つながりあう部分というのがあります。そして、おもしろいことに、自分の専門にとっても、その発見はヒントになることが多いのです。

皆さんには、総合科目をとおして、いろいろなものの間にあるつながりや、一つのものでも、さまざまな見方ができることを、感じてもらいたいと思います。これはつまり、頭を柔軟にすることといえましょう。そのためのお手伝いができれば幸いです。



聞いてほしい私の意見 —新入生のみなさんへ—

齋 藤 圭 — (人文学部・社会科学科)

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。私は、皆さんと入れ違いで大学を卒業し社会人になります。今振り返ると、4年間という時間は、長いようでとても短いものでした。あっという間に終わってしまったという感じです。皆さんは、これからの大学生活に大きな期待、あるいは不安を抱えていることでしょう。新しい環境に慣れるまでは多少苦勞することもあるかと思いますが、しかし、慣れてしまえば充実した大学生活を送れるので心配ないですよ。

大学では高校までとは異なり、自由な時間が多く、自分のやりたいことができる絶好のチャンスに恵まれています。特に、夏休みと春休みは約2カ月間もあります。アルバイト、旅行、趣味など、いろいろなことを経験してほしいです。私も休みを利用し、短期留学や自転車旅行などに挑戦しました。もちろん、休みに入る前には試験があることを忘れてはいけません。高校までのようなテスト形式や、レポート提出の授業もあります。一日にいくつも試験が重なる場合もあるので結構大変です。普段あまり羽目をはずしすぎて、単位が取れなかったなんてことにならないよう気をつけてください。楽しい大学生活を送るためには、自己管理も大切なのです。

私は人文学部の社会科学科に所属していました。社会科学科では、経済学、経営学、法学・政治学、社会学の授業を受けることができます。3年生になり、ゼミナールに所属するまでに幅広く学べます。1、2年生のときにも少人数制の授業があるので、積極的に参加し、メンタル的な部分の強さを養ってください。技術や知識もとても大切ですが、メンタル的な部分はそれ以上に大切です。なぜなら、就職活動などの面接時にはこのメンタルの強さが勝利のカギとなります。自分の意見を人前で発表することが苦手な人は多いはずですが、是非、上手く活用して克服してみてもいいでしょう。まだ自分には先の話だから関係ないなんて思わないでください。4年間なんてあっという間ですから

ね。

最後になりますが、新入生の皆さん、是非とも大学生活を有意義に過ごしてください。今だから出来ること、学べる機会が沢山あります。一つだけに満足せず、欲張りになってください。しかし、それを継続して自分のものにすることが大切です。大学生は時間と環境に恵まれています。あとは皆さん次第ですよ。ようこそ、茨城大学へ！

中 川 雅 之 (教育学部・国語選修)

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これから茨城大学でのびのびと楽しく学び、仲間と一緒に自分を磨いてください。私もこの二年間、仲間と苦楽をともにしながら教育学部で自分を磨いてきました。今回はその二年間の経験を基に、ささやかながらこれから大学生活を始める皆さんにアドバイスをしたいと思います。

大学生活は高校までとは違い、自由度が高く、同時に自分に課される責任も大きくなります。親元を離れて一人暮らしをする人は特にその事に気づいたかもしれませんね。しかし、大学生活における自由は一人暮らしだけではありません。時間割を立てることやサークルに入ること、そして自分のどのような所を伸ばしていくかを決めることなど様々な自由があります。広く見れば、高校までは制限されていた方も多いと思いますが、アルバイトをすることも大学生活における自由と言えるかもしれませんね。

私が入学当初特に苦勞したのが時間割を立てることでした。私は教育学部に所属しており、教員免許を取ることが卒業要件に入っています。免許を取得するためにどの授業を取らなければいけないかをまず考えなくてはならず、仲間と相談しながら科目を選びました。また、一年生では教養科目を履修することになりますが、人文・社会・自然・総合の各分野で様々な科目の中から、自分の興味のあることや専攻に関係のありそうなものを選ぶのは思いの外苦勞しました。正直に言

うと、科目名をただで選んで失敗したものもありました。皆さんはシラバスをしっかりと読んで、内容を見て、後悔しないように選んでくださいね！自分に合った教授や科目に出会えたらきっと自分が磨かれますから。

もう一つ言いたいのは友人関係についてです。大学の授業は（個人差や学部等で差はありますが）高校ほど時間が詰まっておらず、いわゆる空きコマができます。その時間を読書や課題などの自主学習に当てることもできますが、私の場合は、友達と遊びに繰り出すことの方が多いかもしれません。自由な時間が多い中で友達と遊んだり、語り合ったりすることは楽しいですし、自分を磨くことにもつながり、大学生活をより豊かにできるとと思います。しかし、自由な

のをいいことに授業に出なかったり、不規則な生活になりすぎたりしてはいけないと思います。（ましてそれに友達を道連れにしないでくださいね！）授業やレポートなどの課題、また、将来のことなど色々なことを相談できるいい仲間を、この大学生活で作ってってください。

最後になりますが、大学生には自由な時間が多く与えられていると言われます。読書をして自分の知識や考えを深めていくもよし、アルバイトをして社会的な経験を積むもよし、友人と語り合ったり遊んだりするのもよし、皆さん次第で充実させることができるということです。皆さんがその自由の中で自分の選択に責任を持ち、大学生活を実り多いものとして卒業できますように応援しています。

Voice -私のイチオシ授業-

東 大 輔（理学部・地球生命環境科学科）

茨城大学に入学してからもうすぐ4年になりますが、この4年間の間、たくさんの授業を受けてきて、有意義な大学生活を送りました。自分が受けた授業は70近くありますが、そのほとんどがすばらしい授業でした。その中で、自分が受けた一押しの授業を、教養科目と専門科目からそれぞれ一つずつ紹介したいと思います。

まず教養科目の一押しの授業ですが、それは英語Ⅲ（EC）です。この授業は、自分が2年生の時に受けた授業で「英語をもっと勉強したい」という気持ちで受けることにしました。この授業ではほとんどが「聞く」と「話す」ことに重点が置かれていました。やはり、高校までは英語を読んだり書いたりすることばかりやってきたので、最初、先生が英語で自己紹介や感想などを言われても全くわかりませんでした。でも自分が受けた授業の先生は、途中で簡単に日本語で説明してくれたので飽きずに聞くことができました。前半は、主に聞くことをやっていきました。絵や写真を見ながら簡単な問題を解いたり、英語のドラマを見ながら簡単な問題を解いていきました。難しい文法や長文を読まずに、ノートをほとんど取らず楽しく授業を受

けることができました。後半は、主に話すことをやっていきました。自己紹介はもちろん、友達の紹介、自分の好きな国の紹介などをやっていきました。最初は友達と簡単に英語で話して、その後、皆の前で3～4分ぐらい英語で発表しました。最初は自分で書いた英語を見ながら発表していましたが、次第に見ずに発表することができました。この授業で、完璧に聞いたり話したりすることはできませんでしたが、英語が好きになり、英語を勉強する良いキッカケになりました。自分が受けた授業の担当は日本の先生でしたが、外国人の先生もお勧めなのでぜひ受けてみてください。

次に、専門科目の一押しの授業を紹介したいと思います。それは「遺伝生物学」です。2年生の時に受けました。この授業は興味本位で受けてみました。この授業の中身は遺伝についてでしたが、高校の時に習ったことよりも深い内容を勉強しました。この授業では遺伝の基礎的なことはもちろん、先生が現在研究していることの説明もしてくれて、とても楽しく受けることができました。この授業で、自分は生物に興味を持ち、自分の専門を生物にしました。このように、すばらしい授業はたくさんあるので、ぜひ積極的にいろいろな授業を受けてみてください。

渡 辺 憲 明 (工学部・システム工学科)

私は現在、システム工学科に在籍しています。この学科は、材料設計、電子回路、コンピューターまで幅広い分野を学ぶことができます。その際、パソコンの基本的な使い方を理解しておかなければいけません。私は、パソコンの操作がまったくできないというほどの初心者でした。

私は2年次の前期に、「コンピューターリテラシー」という講義を受けました。この講義の内容は、WordやExcel、Web検索、PowerPoint、ネットワーク接続、メールの送受信などのコンピューターの基本的操作から、C言語の学習といった、パソコンを使用する際に必要な知識・技能を習得することです。このような講義は他の学科にもありますが、システム工学科のこの講義ではタッチタイピング、つまり、キーボードを見ないでタイピングできるという技術の習得が義務付けられています。最初は、タッチタイピングの習得には全然自信が持てませんでした。そこで、私は自宅以外でもタッチタイピングの練習ができるように、A4の用紙にキーボードの位置を大きさも同じように書いて、講義と講義の空き時間に練習できるようにしました。そして、タッチタイピングのテストの日が来ました。とても緊張し、指が震えて、1度目のテストでは不合格になってしまいました。それでも、練習は続けました。そして、2回目のテストで合格することができました。

この経験は後々に大きく影響しました。それは、レポートの作成の際です。タッチタイピングにより作成時間が短縮されました。役に立つのはレポートだけではありません。社会に出て、パソコンを使うような仕事に就きたい人には、タッチタイピングはきっと役に立つはずです。私も社会に出て、パソコンを使う仕事に就きたいので、この講義を通してタッチタイピングを習得できたことを幸いに思います。そして、パソコンに親しみを感じるようになりました。私は、この講義を受けてとてもよかったと思っています。

海老原 央 嗣 (農学部・地域環境科学科)

実験というと、決められた手順どおり行い、教科書どおりの結果を導くということをやっていることが多いと思います。しかし、木ノ瀬先生の担当実験は違いました。その内容説明のため、まず木ノ瀬先生がどのような人ということから書き出していこうと思います。

私が受けた先生の担当授業は、水理学や環境水理学など、難しくて有名な授業です。そして、その授業を担当する先生もとても怖い存在です。圧力と言うか何と言うか、とにかくそういうものを感じます。授業も、元々難解なものがさらに難しく感じます。そして、試験ができないとあっさり単位を落とされます（私は何とか落とされずに済みました）。

このような話を聞くと「どこが素敵な授業なんだ？とんでもない授業じゃないか!!」と思う人も多いことでしょう。実際に、授業を受けた私たちはもっとそれを感じました。しかし、まだまだ話はこれからです。

三年生になって水理学実験という講義があり、担当は『噂の木ノ瀬先生』。(現在は残念ながら、担当の先生が変わりました) みんな緊張しながら待っていました。そして、実験の内容について説明するかと思えば、プリントを配り、「その課題を考察するにはどのような実験をすればいいか考えろ。」と言。最初はみんな慌てて、何をしたら良いのかわかりませんでした。しかし、少しずつみんなでどのように実験を行ったら良いか考え、実験を進めていきました。最初からやり方を与えられている実験よりも自分達で調べる分、深い知識を得ることができたと思っています。

研究に関していえば、最初から実験の方法がわかっていることは稀であり、結果を導くために実験方法を考えなければなりません。学生が受身の実験ではなく、学生主体で考えるということを先生は伝えたかったらしいです。

中学、高校と主に受身の授業をしてきたので、最初は戸惑いがあると思います。しかし、研究や仕事という分野は自分から進んでやらなければなりません。そういう面で、この実験の取り組み方はすばらしいものであると感じました。

教養教育古今東西

「教養教育」再談

—大学に学ぶ自分の置かれた構造的な位置づけを知ってこそ—

教養科目の受講に意義を見出せずに悩む学生は昔から決して少なくない。「嫌いな教科も無理して勉強した受験も終わり、やっと自分で選んだ専門がやれると思ったのに、何故まだこんなことを?」... 専門性に従った別々の入試を受けて入学したのに、またそろ「人文」「社会」「自然」の科目を万遍なく... ときは、いくら「教養が高まるから」と言われても、そう簡単に動機が高まるものではない。本当にそこまでしないとけないのか... ?

ここで「教養とは何か?」について改めて講義するつもりは毛頭ない。しかし、本学では「教養教育」と呼ばれる概念の、大学教育全体の中での構造的な位置づけを明らかにすることは、特に教養科目の履修が中心となる入学直後の皆さんにとって決してムダなことではないと思われる。

小学校の「初等」、中学校の「中等」、そして大学の「高等教育」は、それぞれ異なった教育目的を持つ: 初等教育が日常生活に誰もが必要とする最低限の知識や技能を身に付けさせるのに対し、大学は僅かな「エリート」のみが享受できる、極めて高度な学術的専門性に基づく教育が中心となる。最近でこそ進学率の上昇で大学もだいぶ大衆化してきたが、だからと言って高等教育の本質が変わったわけではない。要するに、初等と高等教育のギャップは余りにも大きく、その間を適切な教育課程で連結しない限り、大学教育のレベルは維持できない構造になっているのである。正にその任に当たるのが中等教育の役目なのだ。

しかしながら、中等教育は元来、大学に進む者のためだけに存在するわけではない。戦前に於ける中等教育は実際、職業教育に特化した種々の実業学校と、「普通教育」を施す旧制中学+高校という、大きく二系統の学校群が担っていた。中学と高校で合わせて7年ないし8年の「普通教育」を受けて初めて、学生はようや

く狭義の高等教育を受けられるだけの基盤が構築できたのである。

占領軍による戦後の教育改革は、そうした高等教育の基盤形成を直撃した。アメリカと同様、中等教育を「教養ある市民の育成」という教育目的で一元化したため、新制高校では高等教育用の基礎教育を施すカリキュラムが組み込まなくなったのである。日本の場合は更に、アメリカには存在しない受験体制が中等教育の内実を形骸化する。結局、高等教育のレベルを維持するためには、大学のカリキュラムの中に基礎教育部分を組み込み、本来の高等教育の準備段階に充てざるを得なかった。これがいわゆる「General Education」だ。

もうお分かりだと思う。「教養教育」は単なる「付け足し」などでは決してない。高等教育を成立させるための必要条件なのだ。その意味での教養教育は古来より、哲学を中心とした Liberal Arts が担ってきた。デカルトやライプニッツといった大学者は一様に哲学研究でも抜きん出ていることから、全ての学問にとって Liberal Arts が如何に重要視されていたかを物語る。

このように、教養教育には二千年以上に亘る基盤教育の理念が脈々と流れている。さあ、あなたも教養教育に正面から取り組み、一日も早く受験教育を脱して輝かしいアカデミズムの世界へ!

(人文学部 藤井 文男)

発行日 平成17年4月
 発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
 水戸市文京2-1-1
 029 (228) 8416 (学務課教養教育係)